藁と生活

ワラで始まりワラで終わる

農家のワラと生活

宮城県丸森町出身・荒川美津三さん（91 歳）

本展で宮城県丸森町の門飾りを再現してくださった荒川美津三さん（91 歳）は、丸森町で農家の五男として生まれました。以下は荒川さんからお聞きした、昔の農家のワラとの生活です。

◉育てる作物には役割がある

荒川さん。70年使い続けた鎌を持って。

「私の家で育てていたものは、米、麦、ほうき草、モチ米、粟。お米はお客様用で、私たちの普段の食事は麦。粟は蛋のエサ用。ほうき草は、農家の家ではみんな畑の端にひと畝植えていました。庭箒を作って庭の掃除をするほか、穀物を集める作業にも使っていました。そしてモチ米は必ず育てないとだめですね。神事には餅を作ってお供えしますから。

一年の農作業が全て終わると『庭（にわぼれ）』をします。新しいモチ米で庭払餅（にわはれもち）を作って近所に配り、『ウチは庭払しました』と伝えます。でもね、餅にする前の、蒸しただけの状態を『おふかし』といって、これは近所に配らず神棚へお供えするの。なぜ餅を供えないのかわからないけれど、“初めの姿”ということかな？

昔は農作業が忙しくて、1 日 3 回もご飯を炊いていられないから、朝にドンッと 2 回分くらいのご飯を炊きます。だからワラで作った『おひつ入れ』で保温していたのね。ご飯はもちろんお米じゃなくて大麦。おかずはおしんことか辛いもの。たくあん、はくさい、きゅうりの味噌漬け。私はお茶碗 2 杯くらいは食べていましたね（笑）。」

◉一人前に働く

「私は 16 歳頃から農家を継いで働いていました。昔は 18 歳で徴用（兵役以外の業務）、20 歳で赤紙（召集令状）でしょ。長男と次男は戦争で中国に行って、三男は佐世保の軍港で働いて、四男は中島の飛行機を作る工場で働いて。だから五男の私が家の仕事を全てをやりましたの。

365 日休みなし。夏は朝 4 時に起きて牛や馬、ブタ、鶏の世話。朝食をとったら 7 時から農作業。もう一人前でしたよ。『蓑（みの）、鎌、砥石』を常に身につけて田んぼにいきました。そして田の土を『あんころ餅』のような柔らかさにするのね。そうすると籾（もみ）が浮かないの。馬は軍に持って行かれたから、牛を飼って田んぼをさせてね。そして田植えの時だけは白ご飯。真っ白いおにぎりを持っていくの。土手に蓑を敷いて食べたのね。ほんとうによく働いたなあ…。」

◉ワラ仕事

「冬の間や、雨が降って仕事ができない日は、男たちが一つの家の納屋に集まってワラ仕事をしました。忙しい時には作れないような大量の日用品をワラで作ります。縄とか、蓑とかね。するとメンバーの中に上手な人や下手な人がいて、『あいつより上手くやるぞ』と競争心が生まれましたね。草履なんて 30 ～ 60 分くらいで作れますよ。私が小さい頃、父が農作業に出るとき、「（自分が帰るまでに）ワラ打っとけよー」と言うんです。ワラを叩いて柔らかくしておきなさいと。すると夜、囲炉裏を囲んで父が子どもたちの草鞋を編んでくれる。子どもの草鞋はすぐボロボロになりますからねぇ。

ワラは一本の宝です。これで何でも作りましたから。まずは縄。昔は縛るものは縄しかないので、秋の夜長にたくさん縄ないをしました。あとは鋼敷き、簀敷き、おひつ入れ、蓑、わらじ、草履、べんけい、雪んご子、円座、ミゴ笥…。みんなワラで作りました。蛋に敷く紙も『ワラダガミ』という 5 ワラの紙です。ワラを細かく切って、米のとぎ汁や米ぬかをまぜて、牛や馬のエサにもしました。お米と同じくらい、ワラは大切なものなのです。」

◉戦時中の正月

「お正月は旧暦で厳粛に祝っていました。年末の 28 日頃、まずお風呂に入って、体を清めてからしめ縄を作ります。長くしたしめ縄を部屋にぐるりと張り巡らし、丸くした小さな輪飾りは若水を汲む桶に飾ります。

大晦日の夜に出されるは『年取り膳』は残さず食べるように言われました。その年のものは新しい年に持ち越さないようにね。だから、そんなにご馳走は作りませんでしたよ。明け方には家長が若水を汲みにいきます。この水はお雑煮やお茶に使います。そして、朝になると皆でおせちを食べるのです。

戦時中もしめかざりはしていました。あれはどんな時でもします。しめかざりにはモチ米のワラを使ってね。長くてしなやかだから作りやすいの。ただ、どんど焼きはしませんでしたよ。煙で敵に見つかりますからね。正月が過ぎたしめかざりはお焚き上げをせず、山にある神社の移のまわりに置いていました。

戦時中は色々なものが無くなりました。『鉄』も軍に持っていかれました。自在鉤（じざいかぎ）や鍋、釜、仏像もね。小学校 5 年生の時は音楽の時間もなくなりましたよ。そのかわり、縄ないの時間になりましたよ。」

◉ワラで始まり、 ワラで終わる

「正月が過ぎたら、仕事始めに「荷縄」を綯います。そして年末の仕事納めは「しめかざり」づくりです。農家の生活は、ワラで始まってワラで終わるのです。

ワラ細工は先祖が考えぬいて作り上げた農民の文化ですからねぇ。絶対になくせません。私もね、先人がどうやってこの形を作ってきたのかと考えます。いつも先人に感謝しながら作っているのです。

作っているとわかるのですが、目に見えないところに大事なことが隠れているんです。力の入れ具合や、ちょっとしたところにね。草鞋にしろ、蓑にしろ、自分自身がそれを使っていたから、どこが切れやすいかわかります。そして、そこを強く作ることができる。だから教科書なんて作れないのです。私もこの先短いので、知ってるものだけでも作っておこうと思って。そうしたら、あとから誰かが見て作れるでしょ？」

昨日のことのように話す荒川さんの言葉は、優しくも強く、心に響きます。そしてつい先日いただいたお手紙には、ご自身のことを「まだまだ修行が足りない!!」とビックリマークを 2 つも付けて書かれていて、私の方が驚きました。このようなお人柄だからこそ、いつも周りには人が集まるのでしょう。

その若い仲間の力を借りて、2017 年からは故郷丸森町の門飾りを星川杉山神社（横浜市保土ヶ谷区）に再現・設置しています。荒川さんはいつも、「森さんの絵本のお陰で！」と言ってくださいます。実は私の絵本に描かれている広島県・宮島の門飾りが、丸森町のものと似ていたため、「自分ももう一度故郷の門飾りを作りたい！」と奮起されたそうです。誰かの記憶が時空を超えて自分の記憶とリンクする。それだけでも素敵なことなのに、そこから実行に移した行動力には感謝しかありません。そのお陰で、現代の私たちがこの門飾りを見ることができ、さらに若い仲間にも技術が伝わるのです。

宮島・岩惣の門飾り。
「しめかざり」（福音館書店）より

隣の「第 2 室」には、絵本に描いた宮島の老舗旅館「岩惣」のお飾りが一部展示してあります（J. イノチのカタチ _No.437・438）。絵本は受付に見本があります。

また、この「第 3 室」には荒川さんのワラ細工を展示しています。ワラ細工から垣間見られる農家の生活や、用途に即した技の数々をじっくりとご覧ください。

特にマネキンが着ている「雪んご子」は大作で、必見です。